一つ目は。最初の文字はこれまで何度も出てきた「御」です。は「反」ですね。は前出の（扨）に似ていますが、「物」です。つまり「反物」ですね。西陣織りの反物でしょうか？

（并）の次の（御うちわ）と（御とふろふ）は読みやすいかと思います。「と」は前回もでてきた「止」を、「ふ」は「不」をくずしたものになります。

続いて、（猶）以降、⑩行の を読んでみましょう。は「私ニも」と読みます。「も」は「毛」をくずしたものです。その次のは、久光が心配していた「はしか」です。「は」は「波」を、「か」は「おさかなづくし」でも取り上げた「可」をくずしたものです。は「かろく」で、最後のは「仕　申　候」と読みます。「仕」は「する」「なる」の謙譲語で、「申」も謙譲の意を示す語句です。また、「候」は、現在で言えば「～（でございます）」にあたり、この「候」を用いて書かれた文体を「候　文」と言います。「候」は頻繁に使われることから、大きくくずされることがよくあり、この手紙のように、と書くだけで「候」と読ませることもありますので憶えておいてください。意訳するならば、「私も麻疹に軽く罹りました」です。

久光が心配していた麻疹は、鹿児島でも猛威をふるい、前回も参照した「奥日記（日帳）」によれば、久光の子どもたちも次々と感染、発症しました。於成の場合、六月二十一日頃から発熱が見られ、二十五日には「於成様御事いよく御麻疹ニ而、今ばんより御め度御夜つめ申し上候事」と、容態が悪化し、夜通しの看病が必要だったようです。幸いにも三日後の二十八日になると「御機嫌克、もはや御よろしく被為入候ニ付、御め度御夜つめ今ばん御引とり申上候事」とあり、ですみました。このことから、於成の手紙が書かれたのは、六月二十八日以降だと推定することができます。